

日本博京都府域展開アート・プロジェクト | もうひとつの京都
京都: Re-Search 2020



ごあいさつ

Introduction

京都府内では交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げるさまざまな取組を行っています。その一つとして、アーティストが一定期間滞在し、地域で制作を行うアーティスト・イン・レジデンス※事業「京都:Re-Search」、「大京都」を実施し、地域が本来持ち得ているポテンシャルやその魅力をアート視点から引き出すことを試みています。

2020年度は8月から9月にかけて、八幡市内で「京都:Re-Search 2020 in 八幡」を、南丹市内で「京都:Re-Search 2020 in 南丹」を実施しました。

そして10月、京丹後市内で昨年度に実施した展覧会事業「大京都 2019 in 京丹後～風景泥棒～」に引き続き「大京都芸術祭 2020 in 京丹後～風景泥棒2～」を、和束町内では「京都:Re-Search 2019 in 和束」のリリースをもとにした「大京都 2020 in 和束ー未開へのわだちー」を開催しました。

※アーティスト・イン・レジデンスとは

芸術制作を行う人物を一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながら作品制作を行うチャンスを提供する事業のこと。日本国内ではアーティストの育成や支援だけでなく、空き家・商店街の空き店舗を活用した地域振興や人の交流による地域活性の手段として用いられている。

目次

Contents

- P.02 はじめに
- P.05 リサーチのながれ
- P.06 京都:Re-Search 2020 in 八幡
2020年8月24日(月)ー9月6日(日)
- P.12 京都:Re-Search 2020 in 南丹
2020年9月7日(月)ー9月20日(日)
- P.18 大京都芸術祭 2020 in 京丹後
風景泥棒2 | Landscape Rippers 2
2020年10月23日(金)ー25日(日)
10月30日(金)ー11月3日(火・祝)
11月6日(金)ー8日(日)
11月13日(金)ー15日(日)
- P.40 大京都 2020 in 和束
未開へのわだち
Ruts to the new uncivilization
2020年10月30日(金)ー11月1日(日)
11月6日(金)ー8日(日)
11月13日(金)ー15日(日)



リサーチのながれ

How to Re-Search



リサーチ「京都:Re-Search」

京都府内外で活動するアーティストはもちろん、工芸家、デザイナー、建築家など、クリエイティブな分野で活動している人が府内市町村に短期滞在しながら、各自が設定したテーマに沿って、地域の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想を作成し次年度の実現を目指します。

京都:Re-Search 2018 in 京丹後

2018年 8月20日[月]－9月2日[日]

京都:Re-Search 2019 in 和束

2019年 8月26日[月]－9月8日[日]

京都:Re-Search 2020 in 八幡

2020年 8月24日[月]－9月6日[日]

京都:Re-Search 2020 in 南丹

2020年 9月7日[月]－9月20日[日]

展覧会「大京都」

京都府内各地で行われたリサーチをもとに、地域の新しいアートドキュメント(＝記録)作品を制作・発表します。約2ヶ月間におよぶ滞在制作と、そのプロセスを実施市町村内の各所で公開し発表することで、広く住民が文化芸術に触れる機会を創出し、住民の新たな文化芸術創造につなげる拠点を構築します。

大京都 2020 in 京丹後

風景泥棒 2 | Landscape Rippers 2

2020年10月23日[金]－25日[金]/

10月30日[金]－11月3日[火・祝]/

11月6日[金]－8日[日]/11月13日[金]－15日[日]

大京都 2020 in 和束

未開へのわだち | Ruts to the new uncivilization

2020年10月30日[金]－11月1日[日]/

11月6日[金]－8日[日]/11月13日[金]－15日[日]

大京都 2021 in 八幡&南丹

2021年 開催予定



京都府アーティスト・イン・
レジデンス事業

京都： Re-Search 2020 in 八幡

kyoto-research.com

8月24日から9月6日の14日間、京都府内外で活動するアーティストが市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、八幡市の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想をして、次年度にそのプランの実現を目指します。また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。



開催概要

日程

2020年8月24日〔月〕～9月6日〔日〕

滞在場所

京都府八幡市男山
UR男山団地

講師

石川 竜一（写真家）
島袋 道浩（美術家）
服部 文祥（登山家/作家）

参加アーティスト

川口 翔平
佐々木 香輔
信夫 あゆみ
中島 明日香
藤生 恭平
宮本 一行

ホームページ

kyoto-research.com/yawata2020

プログラム

8月24日〔月〕15:00～

ガイダンス及び
ゲストアーティストとの交流会
会場 松花堂庭園・美術館
講師 石川 竜一

8月25日〔火〕

フィールドワーク、その後参加者からの
プレゼンテーションと
ゲストアーティストによるアドバイス

アートプロジェクトや作品プランを組み立てて行くためのヒントとなる、八幡市内の場所（現地）をゲストアーティストと実際に調査しながら巡ります。フィールドワーク終了後には参加者からのプレゼン、それに対するゲストアーティストからの様々な意見やアドバイスをいただきます。

8月26日〔水〕～8月29日〔土〕

各自リサーチ期間 計4日間

8月30日〔日〕

参加者による中間報告会及び
ゲストアーティストによるアドバイス
会場 石清水八幡宮研修センター清峯殿
講師 石川 竜一
ワークショップ 1 ※1
「折り返しディスカッション」
講師 島袋 道浩×石川 竜一

8月31日〔月〕

ワークショップ 2 ※1
「地域とアートプロジェクト」
会場 男山団地「だんだんテラス」
講師 服部 文祥

9月1日〔火〕～9月4日〔金〕

各自リサーチ期間 計4日間

9月5日〔土〕

講評会及び活動報告展 ※2
会場 松花堂庭園・美術館
ゲストアーティスト 石川 竜一

9月6日〔日〕

参加者の活動報告展

※1 本プログラムでのワークショップとは、情報の交換や共有のみならず、アイデアの出し合いやディスカッションを繰り返し、各自が設定したテーマに沿ったアートプロジェクトや作品プランの実現に向けた戦略や施策などを固めていくものです。

※2 次年度、本プログラムで提案されたアートプロジェクトや作品プランをもとにした展覧会を伴うアーティスト・イン・レジデンス事業「大京都2021 in 八幡」の開催を八幡市内で予定しています。

川口 翔平
KAWAGUCHI Shohei

団地のコミュニティスペース「だんだんテラス」の方々と、リサーチの内容や、過去にパリで取り組んだプロジェクト、「だんだんテラス」の成り立ちと運営など、都市に関する様々な話題で盛り上がり、結果的に7時間議論していたことはハプニングでした。



今回のリサーチテーマ

《『機能的なもの』『植物』『聖なるもの』》

なぜか遊具の下にのみ草が生えていた男山団地のあそび場の遊具に着目し、観察や利用者へのインタビュー、団地の植物のリサーチを進め、信夫さんとともに

『黄ジャン様』という団地の黄色いジャングルジムに植物を生やし聖なるものにしてみるプロジェクトを提案しました。

佐々木 香輔
SASAKI Kyosuke

橋本の遊郭として栄えた歴史や、妓楼建築の意匠は外部者である私にはとても興味深く、時間をかけて調査・撮影も行いましたが、調査を進めるうちに「遊郭」という言葉だけでは括ることができない人々の細やかな感情の動き、想いがあることに、身を持って気付かされました。



今回のリサーチテーマ

《橋本の再開発、その受容と変容》

地名の由来である【はしのたもと】を目指し、自らの手で草を刈って道を作り、その写真と映像を展示しました。行為自体は単純ですが、治水の影響や無断耕作の問題な

ど思いがけない話を聞くことができ、雑草が生い茂っただけの風景にも、様々な事象が複雑に絡み合っていることを発見しました。



信夫 あゆみ
SHINOBU Ayumi

自分のスマートフォンを落として故障させてしまい、急遽、買い替えに行きました。取り落としたスマートフォンの画面には色とりどりの線が次々と表示されるようになり、「機能的なもの」の終わりを見るようで、思わずその画面の様子を動画に撮りました。

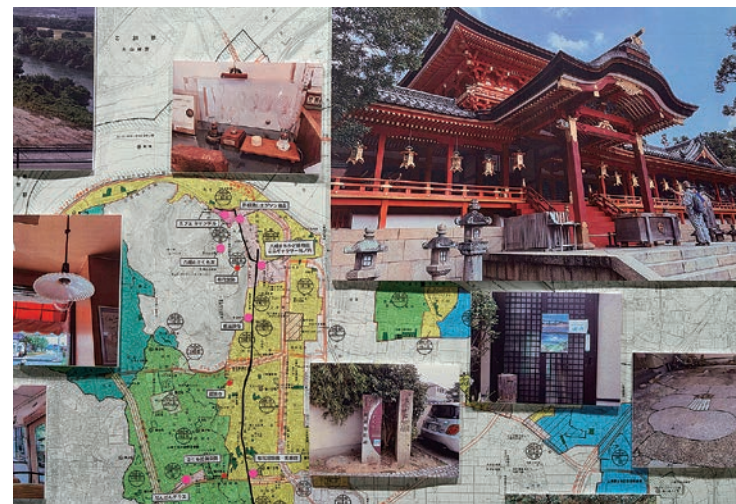


今回のリサーチテーマ

《男山団地の近所に住む老夫婦へのインタビューと、植物に埋もれていくこと》

老夫婦の家の庭の草木が生い茂り、家が植物に埋もれていっている様子が印象的でした。さらに石清水八幡宮でも灯籠や塀が草木に埋

もれていく様子が観察され、川口さんと「機能的なものが植物に埋もれていくと聖なるものになっていく」というコンセプトにまとめました。



今回のリサーチテーマ

《とにかく人に会い、会話の中で掘り出すこと》

人に会いたいと強く思っていたので、駅前の喫茶店から始め、人の話から次の場所や人を連想してリサーチを進めました。「石清水八幡宮はあなたにとってどのよう

な存在か?」「あなたの中に存在するか?」といった質問や、習慣やルーティンについてアンケートを行いました。

中島 明日香
NAKASHIMA Asuka

「石清水八幡宮は町に暮らす人にとって揺るぎないシンボルなのだろう。」と思い込みリサーチを始めましたが、「あまりなんとも思っていない。」というような答えが多く、衝撃が大きかったです。そこから「この町の中心とは何なのか?」という問いが発生し、迷走しました。



藤生 恭平 FUJIO Kyohei

実際に身体を動かしたり、資料を読んで知識を深めたりと、リサーチを進めるほど、“三川合流してるところに行ってみたい(見てみたい)”という最初の動機(衝動)から遠ざかった気がしています。今後、その動機(衝動)を大切にできればと思っています。



今回のリサーチテーマ

《桂川、宇治川、木津川の『三川合流』するところに行ってみたい》

八幡の三川が合流する地点を目指しましたが、途中で道がなくなっていました。最終的に陸路と水路でたどり着きましたが、水位の変化など

で正確な点はわからず、棒を突き刺して勝手に決めさせていただきました。三川合流とは様子や風景であり、目的地ではないのかもしれない。



今回のリサーチテーマ

《木造橋『安居橋』と『流れ橋(上津屋橋)》

橋の全ての床板を一定の速度で踏み鳴らしていくことで、日常生活の中で聞き流されている特徴的な音響を引き出すことを試みました。

その録音の音響特性を分析することで、それぞれの橋名を付けた楽譜を作成し、「リサーチ・ノート」として提示しました。



今回のリサーチテーマ

《桂川、宇治川、木津川の『三川合流』するところに行ってみたい》

八幡の三川が合流する地点を目指しましたが、途中で道がなくなっていました。最終的に陸路と水路でたどり着きましたが、水位の変化など

で正確な点はわからず、棒を突き刺して勝手に決めさせていただきました。三川合流とは様子や風景であり、目的地ではないのかもしれない。

宮本 一行 MIYAMOTO Kazuyuki

これまでの実践からトロンボーンでのパフォーマンスに取り組みましたが、中間報告で「まずはトロンボーンを置いてみる」とコメントをいただき、自分の身体を以って環境とどのように対話をするのか、改めて考えるきっかけになりました。



石川 竜一

ゲストアーティスト

ISHIKAWA Ryuichi

写真家

1984年沖縄県生まれ、沖縄国際大学社会文化学科卒業。在学中に写真と出会う。2008年より前衛舞踊家しば正龍の付き人を務める。2010年より写真家 勇崎哲士に師事し、写真に関わる広い分野の企画から運営までのアシスタントを務める。2014年に沖縄の人々や身近な環境で撮影したスナップを纏めた『okinawan portraits 2010-2012』『絶景のポリフォニー』で、木村伊兵衛写真賞、日本写真協会新人賞、沖縄タイムス芸術選奨奨励賞を受賞。沖縄を拠点に、日常のスナップやポートレイトを中心にして、現代の矛盾と混沌に向き合いつつも、そこから光を探るような作品を発表している。2020年現在、活動の場を日本国内外に広げ、その内容もビデオ作品や他ジャンルのアーティストとの共作、ミュージシャンとのセッションなど多岐にわたる。

川口 翔平

参加アーティスト

KAWAGUCHI Shohei

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修士課程。フランス国立土木学校都市・交通・環境コース都市計画専攻修士課程。「都市の興味深い『点』を発見し、それをまちの人々と共有すること」をコンセプトに、都市のリサーチ・デザイン・議論の場づくり・ワークショップ・学術研究等を、「コレクティヴ・ポイント」として行っている。最近のプロジェクトとして、「SciREX地震ワークショップ in 伊勢崎」(オンライン、2020)、「痛みのバリガラス編」(パリ、2020)、「レ・クール・ダヴァー」(パリ、2019-2020)等がある。

信夫 あゆみ

参加アーティスト

SHINOBU Ayumi

1994年大阪府生まれ。東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修士課程在籍。都市のおもしろいポイントを発見し、地域の人と共有、発展させていくことに関心を持ち、「コレクティヴ・ポイント」というグループにて、都市に関するリサーチや議論の場づくり、ワークショップのファシリテーションやインスタレーションの作成等を行う。主なプロジェクトに「都市の肖像 ミンスク」(ミンスク、2019)、「痛みのバリガラス編」(パリ、2020)などがある。

島袋 道浩

講師

SHIMABUKU

美術家

1969年神戸市生まれ。那覇市在住。1990年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、そこに生きる人々や動物、風習や環境に関係したインスタレーションやパフォーマンス、ビデオ作品を制作している。パリのボンビドー・センターやロンドンのヘイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェネチア・ビエンナーレ(2003/2017)、サンパウロ・ビエンナーレ(2006)などの国際展に多数参加。2004年から2016年まではドイツ、ベルリンを拠点にし、ドイツ、ブラウンシュワイグ芸術大学やスイス、チューリッヒ芸術大学などで客員教授を務める。著書に「扉を開ける」(リトルモア)、絵本「キュウリの旅」(小学館)などがある。

佐々木 香輔

参加アーティスト

SASAKI Kyosuke

1985年宮城県仙台市生まれ。2007年日本大学芸術学部写真学科卒。2007-09年、美術品撮影専門の株式会社飛鳥園に勤務、小川光三に師事。2009-20年、奈良国立博物館に写真技師として勤務。現在はフリーの写真家として活動。歴史や時間の重なり、記憶の継承を主題とする写真を主に制作。第41回キヤノン写真新世紀優秀賞(2018)。第22回写真「1 WALL」展ファイナリスト(2020)。

中島 明日香

参加アーティスト

NAKASHIMA Asuka

造形作家。1985年兵庫県生まれ。同在住。地元の兵庫県養父市にUターンし、地域の失われていくモノやコトを掘り起こし、継承・共有・保管していくことをテーマとしたアートプロジェクトを、地域の中で暮らしながら行っている。また地域コミュニティの中で個人にとっての“居場所”をコンセプトとした、こども造形ワークショップや即席アトリエなどの活動もしている。

略歴 Biography

服部 文祥

講師

HATTORI Bunsho

登山家/作家

1969年横浜生まれ。94年東京都立大学フランス文学科とワンダーフォーゲル部卒。学生時代からオールラウンドな登山をおこない、1996年K2(8611m)登頂。北アルプス北部などで冬期初登攀記録が数本。2000年頃から食料と燃料を現地で調達する長期登山のサバイバル登山を提唱実践。その思想と実践を著書『サバイバル登山家』で報告し、情熱大陸などに取り上げられる。『ソンドラ・サバイバル』が第5回梅棹忠夫山と探険文学賞、小説『息子と狩猟に』が第31回三島由紀夫賞候補。

藤生 恭平

参加アーティスト

FUJIO Kyohei

1989年三重県伊賀市生まれ、京都在住。“人が自然環境を開拓/管理していくこと”をテーマに、写真・映像・インスタレーション・パフォーマンス、などの作品を制作をする。主な展覧会に、「木津川アート2018」(京都府木津川市)、「適地適作」(53美術館、中国広州市、2019)、「記録する遊戯 #2 なんて花はじっくり見れんのにかびはじっくり見れへんのかはわからん」(わいわいば〜、京都、2020)など。

宮本 一行

参加アーティスト

MIYAMOTO Kazuyuki

美術家・現代音楽家。1987年千葉県生まれ。2012年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻映像コース修了。音や光の現象を主体的に認識することを通じて、身の回りの環境に直接的なアプローチを図る表現活動に取り組んでいる。2019年より秋田公立美術大学大学院博士後期課程に在籍。

京都府アーティスト・イン・
レジデンス事業

京都： Re-Search

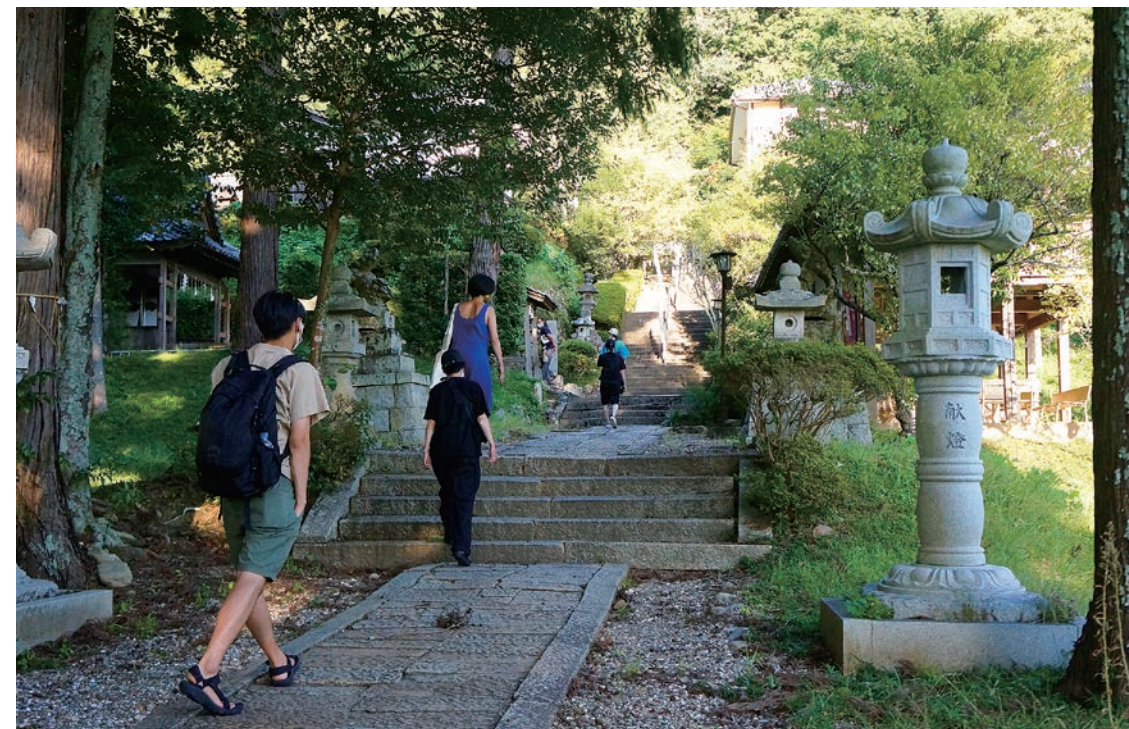
2020

kyoto-research.com

in 南丹

参加者募集!!

9月7日から14日間、京都府内外で活動するアーティストが市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、南丹市の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想をして、次年度にそのプランの実現を目指します。また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。



開催概要

日程

2020年9月7日〔月〕～9月20日〔日〕

滞在場所

京都府南丹市園部町本町77

「合羽家」

南丹市八木町八木鹿草76

「気になる木JUJU」

講師

荒木 悠（映像作家）

長谷川 新（インディペンデントキュレーター）

彦坂 敏昭（画家）

参加アーティスト

亀川 果野

黒木 結

小山 渉

山田 春江

羊 喘兒

ホームページ

kyoto-research.com/

nantan2020

プログラム

9月7日〔月〕 15:00～

ガイダンス及び

ゲストアーティストとの交流会

会場 南丹市役所

講師 荒木 悠

9月8日〔火〕

フィールドワーク、その後参加者からの

プレゼンテーションと

ゲストアーティストによるアドバイス

アートプロジェクトや作品プランを組み立てて行くためのヒントとなる、南丹市内の場所（現地）をゲストアーティストと実際に調査しながら巡ります。フィールドワーク終了後には参加者からのプレゼン、それに対するゲストアーティストからの様々な意見やアドバイスをいただきます。

9月9日〔水〕～9月13日〔日〕

各自リサーチ期間 計5日間

9月14日〔月〕

ワークショップ 1

「地域とアートプロジェクト」※1

会場 南丹市役所八木支所

講師 長谷川 新

9月15日〔火〕

参加者による中間報告会及び

ゲストアーティストによるアドバイス

会場 南丹市役所八木支所

講師 荒木 悠

ワークショップ 2

「折り返しディスカッション」※2

講師 彦坂 敏昭 × 荒木 悠

9月16日〔水〕～9月18日〔金〕

各自リサーチ期間 計3日間

9月19日〔土〕

講評会及び活動報告展

会場 南丹市役所八木支所

ゲストアーティスト 荒木 悠

9月20日〔日〕

参加者の活動報告展

※1 本プログラムでのワークショップとは、情報の交換や共有のみならず、アイデアの出し合いやディスカッションを繰り返し、各自が設定したテーマに沿ったアートプロジェクトや作品プランの実現に向けた戦略や施策などを固めていくものです。

※2 次年度、本プログラムで提案されたアートプロジェクトや作品プランをもとにした展覧会を伴うアーティスト・イン・レジデンス事業「大京都2021 in 南丹」の開催を南丹市内で予定しています。

亀川 果野 KAMEGAWA Kano

リサーチの中で、日吉ダムによって水没した天若の地に住んでいた方に話を聞くことができ、資料からは読み取れない実感の伴う声の力を感じました。それ故の、その実感として力のある情報を自分の中でどう咀嚼し扱うか、という迷いもありました。



今回のリサーチテーマ

《川とこの地に住む人々：日吉ダムに焦点を当てて》

南丹で一番印象的だったのが、「川に見える風景」の多さ。川とここに住む人々との関係を掘り下げていくと、日吉ダムの存在がひとつの象徴のように感じられました。こ

れら私が受けた印象を、これまで私が行ってきた日本画の制作過程と重ね合わせることで咀嚼し、アウトプットしていきたい。



小山 涉 KOYAMA Wataru

運命的な出会いは玉岩地藏堂へ訪れた時に起こり、出会ったのは人ではなく「流れ落ちる水」でした。湧き出る水の勢いが、私が話すとうなずくかのように強くなったり、否定するかのように急激に弱くなったり。まるで八百比丘尼がそこにいるかのような感覚を覚えました。



今回のリサーチテーマ

《八百比丘尼から考える現代の死生観》

日吉町四ツ谷の玉岩地藏堂には不老不死伝説の八百比丘尼の伝承が残されており、その人間のスケールを越えた生に関心を抱きます。それに加えてコロナ渦の現在

と身近な人の死の影響から、私は今も生き続けているといわれる八百比丘尼の影を追い求め、現代の死生観の片鱗を考えてみたい。



黒木 結 KUROKI Yui

南丹市集落支援員の八木さんに、八木町にまつわる話を伺ったり、八木城と内藤如安に詳しい郷土史家の八木さんにお会いしました。貴重な資料を拝見できたことはもちろんですが、おふたりが現在も歴史を学びながら慎重に真実を問い続けている姿が印象的でした。



今回のリサーチテーマ

《消されたキリシタン武将、内藤如安》

八木城主だった内藤如安の史料の多くは、故意に書き換えられたり抹消されています。「故意に消されようとした」歴史が忘れ去られないように、既存の如安顕彰碑の隣

に《完璧な歴史》と題した「消されようとしたことも伝わる新たな碑」を建てたいと考えています。



今回のリサーチテーマ

《人から人へ繋がる丹波音頭》

丹波音頭は、300年前から現在まで歌い継がれてきた民俗芸能です。しかし内容の高度さゆえに継承する人が少なくなっています。音頭を教わりながら、その方の語るリズム

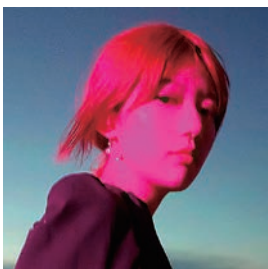
や音、あふれる原風景なる物を私の身体に落とし込み、私の内側がどのように揺らめき、どう皮膚感覚が変化するのかを観察しました。



羊 喘兒

YANG Qinhua

園部町の日常の生活風景は、自然の近くで暮らしたことのない自分には新たな感動と刺激だった。この外部者の目線を通じて、みんなが慣れすぎて無視されている景色の生命力や、この町に関する記憶や、野生のロマンスなどを見せ直したい。日常の中に、少し非日常的な風景を作り上げたいと思う。



今回のリサーチテーマ

《地域振興と商品化：売荒野プロジェクト》

南丹市に滞在中、地域振興の話題をよく耳にしたが「地域資源を掘り起こし、商品化につなげる」など「商品化」が重要なポイントだと感じた。そこで、地域に存在する

「商品価値があるもの」には注目せず、ただの空き地の商品化と虚構の販売行為を通じて、町を観察する新たな視座を提供できないかと考えた。



略歴

Biography

荒木 悠

ARAKI Yu

ゲストアーティスト

映像作家

1985年生まれ。再現・再演・再話の手法を試み、ある事象や象徴の再解釈を提示する映像インスタレーションを展開している。2019年は個展「RUSH HOUR」CAI02(札幌)、「ニッポンノミヤゲ」資生堂ギャラリー(東京)、「New Apéritif」スプリングパレーブルワリー(京都)を開催、またSprout Curation(東京)、アートソング・センター(ソウル)、ピンチューク・アートセンター(キエフ)、Palazzo Ca' Tron(ヴェネツィア)でのグループ展に参加。展覧会の形式にとどまらず、近年では映画祭でも作品が上映されている。

長谷川 新

HASEGAWA Arata

講師

インディペンデントキュレーター

1988年生まれ。主な企画に「無人島にて-「80年代」の彫刻/立体/インスタレーション」(2014、京都)、「パレ・ド・キョート/現実のたてる音」(2015、京都)、「クロニクル、クロニクル!」(2016-17、大阪)、「不純物と免疫」(2017-18、東京、沖縄、バンコク)、「STAYTUNE/D」(2019、富山)、「グランリパース」(2019、メキシコシティ)、「約束の凝集」(2020、東京)など。美術評論家連盟会員、国立民族学博物館共同研究員、日本建築学会書評委員、日本写真芸術専門学校講師、PARADISE AIR ゲストキュレーター、スタジオ四半世紀。

彦坂 敏昭

HICOSAKA Toshiaki

講師

画家

1983年生まれ。絵画を広いパースペクティブの中でのコミュニケーション手段と捉え、人とイメージの関係を問いなおす実践を展開している。2015年はポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスとアイスランドに滞在。2009年はポロック・クラスナー財団(ニューヨーク)より制作支援を受ける。主な個展に大和日英基金(ロンドン、2017)、AISHONANZUKA(香港、2016)、大原美術館(岡山、2009)、資生堂ギャラリー(東京、2008)など。また、兵庫県立美術館、京都芸術センター、東京都現代美術館などでのグループ展に参加。京都芸術大学こども芸術学科講師。木曾路。

亀川 果野

KAMEGAWA Kano

参加アーティスト

1996年熊本県生まれ。2020年広島市立大学大学院 博士前期課程 日本画専攻在籍。絵具自体の持つ物質的要素や作品の制作過程について焦点を当て制作している。

黒木 結

KUROKI Yui

参加アーティスト

1991年生まれ。2017年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。作品制作や展覧会企画を行うほか、近年はご飯を作る代わりにご飯を食べさせてもらう「FOOD」という活動や、「おばけの連判状」という複数人での共同制作活動が続けている。

小山 涉

KOYAMA Wataru

参加アーティスト

1992年東京都生まれ、2016年東京造形大学大学院 情報デザインメディアアート専攻終了現在同校にて博士後期課程 美術研究科博士課程 在学中。ポストインターネット時代におけるビデオアートのナラティブとその変容をメインテーマにする様々な研究制作活動を行っている。作品は、鳳甲美術館(台湾)、YCC横浜創造センター、東京科学未来館、Blockhouse Gallery(東京)、Organhau Art Space(中国重慶)などにて展示された。

山田 春江

YAMADA Harue

参加アーティスト

1985年京都府生まれ。2007年京都精華大学芸術学部造形学科陶芸専攻卒業。舞台、音楽、美術など多岐に渡り表現活動を行う。近年では腹話術ユニット「CHEKAS」を結成し、そこから物質である「人形」との対話を通して身体はどう関係していくかに興味を持ち、制作・パフォーマンスを行う。下宿屋山田荘代表、RCHOTEL京都八坂ディレクターを務める。

大京都芸術祭 2020 in 京丹後

風景泥棒2

Landscape Rippers2

2019年度のアーティスト・イン・レジデンス事業展覧会「大京都」では6組のアーティスト達が参加し『風景泥棒』というタイトルの展覧会を開催しました。風景泥棒とは実際に何かを盗むのではなく、アートを通じて「風景の見え方を変化させてしまう」という意味です。ここで意味する風景とは人の営みや文化、歴史など広い意味を含みます。アートは時に、当たり前に見える日常の風景が作品鑑賞をきっかけに「全く違ったものに見えてしまう」という経験を生むことがあります。それは必ずしも全ての人に起こることとは約束できませんが、具体的には目に映る風景がまるで誰かの絵の中の世界に感じたり、壁の落書きが、見知らぬ外国の土地を思い起こさせたりという体験です。昨年度の展覧会は丹後の近代化を象徴するちりめん織の名家「吉村商店」の工場跡をメイン会場として開催されましたが、本年度は京丹後市内各所に会場を拡大し開催。また京丹後在住のアーティストも加わり、9組のアーティストが展覧会に参加しました。実際に京丹後の多様な風土を巡りながら、アーティストそれぞれが京丹後で盗んだ風景を鑑賞する構成となりました。京丹後に暮らす方々にとっても新鮮な目で街を再発見するきっかけになり、初めて京丹後を訪れた方々にとっても、京丹後と自分自身の街をみる眼差しを転換するきっかけになったかもしれません。

開催概要

開催期間

2020年10月23日(金) - 25日(日)
10月30日(金) - 11月3日(火・祝)
11月6日(金) - 8日(日)
11月13日(金) - 15日(日)
10:00 - 17:00

※ガラシャ荘は16:00まで
※浅茂川区民会館は10/31は閉場

展示会場

吉村機業(株)旧織物工場/
浅茂川区民会館/にしがき網野店
二階/網野町ボーリング場跡地/
ガラシャ荘/三津八幡神社芝居舞台

参加アーティスト

石毛 健太
高橋 臨太郎
田中 良佑
前谷 開
鷺尾 伶

地域クリエイター

DAISAK
NTsKi
川勝小遥

ゲストアーティスト

SIDECORE

プログラム

「オンライン配信トークイベント」
キュレーター×アーティストトーク

10月23日(金) 18:00 - 20:00

開催場所: アサモノヤカタ

ゲスト

勝治 真美
慶野 結香
青木 彬

「展示バスツアー」

土・日・祝日運行

10月24(土) 25(日) 31日(土) 11/1(日)

3日(火・祝) 7(土) 8(日) 14日(土) 15日(日)

集合時間: 12時 集合場所: 峰山駅前

参加費: 無料(お弁当実費 1,000円)

定員: 10名/日

関連イベント

浦嶋太鼓演奏

10月24日(土) 10:00 -

11月1日(日) 10:00 -

会場: 浅茂川区民会館前

網野町浅茂川区文化祭

11月1日(日) 10:00 - 17:00

会場: 浅茂川区民会館

※浅茂川区民会館は、10/31(土)は文化祭準備のため 前谷開の作品展示はなし

主催/協力

主催

京都:Re-Search実行委員会
(京都府、京丹後市ほか)

協力

荒山未来塾/一般社団法人京丹後青年会議所/吉村機業株式会社/
株式会社にしがき/舞鶴海上保安部/
経ヶ岬灯台保存会/浦嶋太鼓保存会/
山崎工業株式会社/
こまねこまつり実行委員会/
白井織物株式会社/京丹後市観光公社/
オーガニックカフェてんとうむしばたけ/
みその/手づくり市実行委員会/
羽衣ステーション/
社会福祉法人京丹後市社会福祉協議会
(ボランティアセンター)/
株式会社オーダーデザインチャンネルズ/
八隅孝治/岡村芳広/長瀬啓二/
川淵一清/坂田真慶/小林朝子/
稲本朱珠/能勢ゆき/杉本由紀乃/
富倉江里子/藤井佳祐/堤かおり/
中島明日香/BIEN/大垣博文/
白数憲生/大垣いづみ/大垣里衣/
浅茂川区/三津区/味土野区/
株式会社奥井工務店/宇川加工所



石毛 健太 ISHIGE Kenta

86%の灯台

協力
高橋茂 / FMたんご



プロジェクターが2台回転しながら会場を照らしています。また会場にあるモニターには映像が映し出されていますが、これは同じプロジェクターを「灯台のような建築物」の内部で回転させて、光を投射した記録です。実はこの「灯台のような建築物」は実際の灯台でなくて、丹後町庁舎の上に作られた、経ヶ岬灯台をモデルとしたオブジェなのです。

石毛は虚構(フィクション)と現実(ノンフィクション)を混じり合わせ、神話のような不可思議な物語を具現化するアーティストです。そもそもの「灯台のような建築物」は、レンズのようなものはありながらも実際に灯台の機能も無ければ、また光を発することもありません。

これは庁舎を設計した建築家がモニュメントとして設置したもので、しかし今でも事情を知らない人は灯台だと思い込んでしまっています。そのような紛らわしいオブジェを実際の灯台のように点灯させてしまうことで、嘘を本当に、もしくはフィクションを現実に変えました。このような石毛の表現は、単には悪戯のような行為ではありますが、しかし一休さんのとんちのように「発想の転換」

によって虚構が現実の解釈を広げるという「想像の力」を追求しています。またそれは虚構であるということ、すなわち「何かがかけているということ」を肯定的に捉え、私達が無意識に凝り固めてしまった固定概念を揺さぶってくれるのです。

※昨年度発表した作品から継続した取り組みとして、「荒れ野の声FM beyond」のラジオ番組を滞在期間中の週末に放送しました。





高橋 臨太郎 TAKAHASHI Rintaro

Lagoon dust

協力

DAISAK/細見工房/澤佳奈枝/
田茂井康悦/丸田智代子/梅田和男/
白杉酒造株式会社



かつて旅芸人や興行師達が使っていた舞台に巨大な釜が置かれています。その中には水が貯められていて、岩のような、人間を模したような不思議な焼き物がおかれています。この作品は京丹後の漁村に多く見られる、「小さな湾となった安山岩の地形」を箱庭のように見立てて作られています。

また、よく耳を澄ますと釜の中で水が滴り落ちる音がします。これは「水琴窟」と呼ばれるもので、この釜の中が空洞であることから水滴の音が反響しているのです。ここで使われている水は三津漁港の湧き水で、さらにこの音はここから100m程離れた三津漁港を見下ろす場所に設置されたスピーカーから音が町に向かって出力されています。

高橋の作品はこの三津漁港の町の環境を、一つの「楽器」として見立てています。普通楽器といえば、持ち歩くことができる一つの装置ですが、高橋のこの楽器は「三津の土地だけで音を奏でる、三津の為だけの楽器」です。この土地の風景を見立てた釜に、この場所の水を垂らして、この街に向かって音を演奏しています。音楽とは常に、

視覚的に何かを見る以上に、見たことのないものへのイメージーションを膨らませることのできるメディアです。だからこそこの作品は、時間の流れや土地の成り立ちど、目に見えない巨大な環境の変化へ想像力を広げることを目的にした楽器であり、音楽を演奏するという目的で作られています。





田中 良佑 TANAKA Ryosuke

Take Me Home (帰る場所を探して)(火を拾いに行こう)

協力
小松恵美/大益牧雄/横野智子/
木下祐治/梅田逸男/濱中雄一/
三本正樹/ガラシャ荘/
野間基幹集落センター/
里山・限界集落けんこう農房



写真や文章、そして植物の影が映された青写真(サイアノタイプ)が展示されています。田中は去年から味土野を題材に作品を制作しており、本作は味土野の3人目となる移住者小松さんの協力の元制作されました。田中は「孤独の色々なたち」をテーマに、移住者それぞれが考える「あえて人里を離れた廃村に暮らすこと」について取材することから着想を得ています。

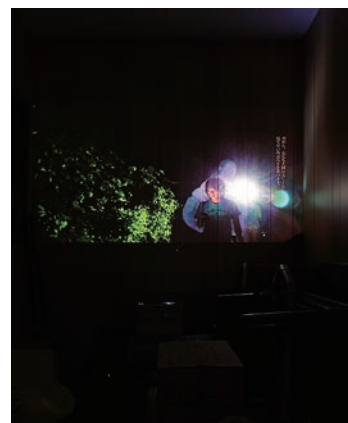
今回の滞在では小松さんの暮らしの中で「ガスが無いわけでは無いが、薪を山から拾い、カマドで火を起こして自炊すること」に注目しました。薪を拾える日もあれば、拾えない日もあり、火が簡単におきる時もあれば、簡単におきない時もある。

このような「予測できないことと向き合うこと」と味土野で暮らすことを重ね、田中は小松さんが日々拾ってくる薪をサイアノタイプに転写しました。そもそもサイアノタイプとは、光だけで影を撮影する写真の一種です。

毎日の生活の中で忘れてしまうような出来事をあえて記録すると同時に、しかしサイア

ノタイプは時間とともに劣化して写像が消えてしまいます。田中は「記憶に残そうとすること」と「忘れてしまうこと」、人間の2つの矛盾する意識をこの展示を通して表現しています。それは孤独を表現していることでもあり、しかし同時に日々の暮らしに光を当てる幸せを表現しています。

※ガラシャ荘内には昨年田中が制作した作品も展示されています。



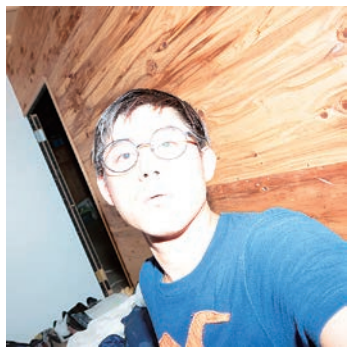


前谷 開 MAETANI Kai

Scape (The light behind your eyes)

協力

本井優香/沖佐々木環/俣野地左/
奥口陽登/沖佐々木範幸



ここ浅川区民会館二階ホールには、前谷がこの京丹後で三年の時間をかけて撮影した様々な写真が展示されており、中二階の階段を上がると同じように京丹後市で撮影された映像作品が展示されています。この場所ではかつて映画の上映が行われており、中二階の空間はかつて映写室(映像を映し出す部屋)として使われていました。そもそも私達は光を通して色や形を認識します。だからこそ写真とは光をフィルムに記録する行為ですし、また映像はフィルムに光を当てる行為です。

展示されている写真は後ろから光を当てられています。写真を見せることだけを目的としているわけではなく、写真を通して鑑賞者に光を当てているのです。このような前谷の考えは、写真でありながらも、写真に写ること以上の風景の体験を伝えることを目的としています。先にも触れましたが、前谷は三年間季節を問わず京丹後に通い、1000枚を超える写真を撮影しました。撮影を続けていると最初は「何か特別なものを写そう」という気持ちがあったそうですが、だんだんと海の景色など日常的で素朴

な風景にこそ目が行くようになったと前谷は言います。しかし反面、この町で目にうつる景色や、体を包み込む光が、より鮮明に感じられるようになったといいます。だからこそ今回の作品は、切り取られた景色ではなく、町を照らす光そのものを一つの写真作品として表現しているのです。

中二階の映像は、昨年度前谷が丹後震災記念館で行ったパフォーマンス作品の連作で、京丹後の風景写真をカメラの構造を反転させ、フィルムの裏側から当てた光を、レンズを通して前谷自身に投射しています。ここでも前谷は写真を切り取られた光の記録ではなく、体に浴びた光の記憶として捉えているのです。



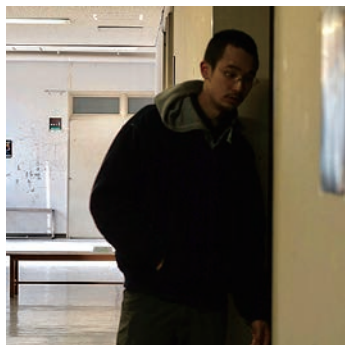


鷺尾 伶 WASHIO Ray

fu

協力

株式会社マルハンプラザ峰山店/
大善株式会社/株式会社明輝建設/川又 健士



元々ボーリング場の跡地であったこの場所に、車やソファ、奇妙なオブジェが置かれており、車からは音がしています。この作品は「正体不明の何者かが、この不思議な場所を占拠して、何か不思議なことをしている」その気配や痕跡そのものを表現しています。

先ほどにも触れましたがこの場所は元々ボーリング場でした。昔を知る人にとってそれは当たり前の景色ですが、何も事情を知らない人にとっては古墳のような謎めいた空間に見えてきます。この鷺尾が作り出した「何者かの痕跡」も、実は誰かにとって「重要かつ、当たり前の何か」なのかもしれません。しかし同時に他者としての私達にとっては、あくまで不審者の怪しい行動に感じることでしょう。

未知と出会い、そして「それ」が何であるのか理解できないにせよ、それと出会いへの想像力を膨らます面白さをこの作品は表現しています。ただ広い空間の所々に、元々そこに放置されていたかのような不思議なオブジェが配置されています。是非ともこの場所で「あったかもしれない出来事」を

想像したり、「ありえた過去の時間」に思いを馳せてみてください。





地域クリエイター

DAISAK NTsKi 川勝小遙

アパレルショップにしがき

協力

Aki Nakata/ブラザホテル吉翠苑/
Yosuke Shimonaka/
網野高校生(小石原央義/岡本尚也/
西垣蓮/田辺潤平/松坂将吾/高田有花子)/
山中篤嗣/田茂井康悦

「にしがき」2階ようこそ!

にしがきとは丹後・舞鶴・豊岡但馬エリアの地域に24の店舗を展開するスーパーマーケットです。京丹後に本社を置き、特にこの丹後エリアとの関わりが深く、地域のライフラインとして親しまれています。また、この「にしがき網野店2階」は2019年3月まで衣料品販売を行っていました。

今回の場所では地域クリエイターとしてDAISAK(ダイサク)が発起人となり、NTsKi(エヌ・ティー・エス・ケー・アイ)、川勝小遙(カワカツコハル)の作品展示を行っています。3人とも全国区で活躍する若手アーティストですが、彼女/彼等だけに留まらず、このような多様なアーティスト達がこの地域を拠点に活動をしていること自体が京丹後の文化的な豊かさを体現しています。

今回、他の地域から来ているアーティスト達がそれぞれの題材/展示場所を選ぶ中、この3名は「にしがき」を展示会場として選びました。京丹後には色々な文化的資源がありますが、日常生活と一番密着した場所でアート作品を発表することは、

その土地に由来のあるアーティスト達だからこそ持つことのできる着眼点です。今回3名は、今は閉場している「にしがき網野店 衣料品売り場」を期間限定で復活させることをテーマに展示を行なっています。DAISAKはオリジナルの「にしがきグッズ」をデザインし、NTsKiはテーマソングの作曲や広告写真の制作、そして川勝は会場構成を行なっています。

3名は閉場してしまった売り場を会場としながらも、懐かしさやノスタルジーに囚われるのではなく、網野町と京丹後市の文化/風景を再発見し、新しい視点で日常を捉え直すことを試んでいます。

DAISAK

ダイサク



DAISAKは今回「にしがき」のグッズを展示しており、これらの作品は実際に店舗レジで購入することが可能です。実はDAISAKが発起人となって2名のアーティストたちを誘い「にしがき」での展示開催が決定しました。DAISAKは2018年より京丹後で陶芸の工房を構え、陶芸作品の制作をしているアーティストです。そもそもDAISAKが京丹後に工房を構えるきっかけになったのは、そこに母親の実家があり、子供の頃から毎年帰郷していたからと言えます。今回DAISAKが「にしがき」グッズをアート作品として制作することは、京丹後を新しい視点で再発見することに繋がるとDAISAKは考えています。まず、にしがきは単なる商店ではなく、京丹後のライフラインそのものです。京丹後に暮らしていると意識することはないですが、現代にここまで土地の生活とスーパーマーケットが結びついていいる地域も珍しく、京丹後の1つの個性となっています。またアーティストとしてのDAISAKの視点から見て、にしがきのロゴは非常にクオリティが高く、普遍性のあるデザインだといえます。だからこそ、これらをグッズとして作ることは冗談ではなく、全国区で人気が出ると考えており、実際にすでに問い合わせが来ています。そもそも「観光」という概念は、外からの眼差しによって見出されるもので、内部からはその魅力や個性に気づくことは難しいものです。京丹後という広いテーマからあえて「にしがき」だけを選ぶDAISAKならではのユーモア溢れる視点は、京丹後に暮らす老若男女が自分達の暮らす環境を再発見することを効果的に促しているのです。



NTsKi

エヌ・ティー・
エス・ケー・アイ



ミュージシャンでもあるNTsKiは楽曲作品と写真作品を制作しました。楽曲作品は「にしがき」のテーマソングを制作した他、にしがき店舗内の音や八丁浜(網野の海岸)の波の音をフィールドレコーディングし、店舗用環境音として演奏再生しています。また写真作品は、DAISAKが制作した「にしがき」のグッズを用いたファッション写真を企画構成しており、これも店舗内各所にディスプレイされています。NTsKiは京丹後の網野を拠点にしていますが、全国区のクラブミュージック・シーンで活躍するミュージシャンであり、実験的かつミステリアスな作風で注目を集めています。NTsKiが制作した「にしがき」のテーマソングは商業店舗らしいポップな楽曲ですが、リバーブの効いた楽しげな歌声はどこか懐かしさを感じさせ、NTsKiの記憶にある子供の頃の「にしがき」や街の風景をノスタルジックに想起させます。フィールドレコーディング楽曲では、本来は同時に聞こえることのない「にしがき店舗内の音」と「八丁浜の波の音」をシンプルにミックスし、網野の風土が奏でる音そのものをメディテーション・ミュージックとして見立てています。また「にしがき」店舗内で撮影された写真作品は中性的なモデル像が撮影されており、未来的でありながらレトロな雰囲気演出され、固定観念や時代感覚が揺らぐミステリアスな内容となっています。音楽におけるサンプリング(音楽の断片だけを切り出す)の手法によって「にしがき」の要素を切り出し、網野の風景を異世界へとミクシング(編集)します。普段見ている景色でさえ感じたかた・考えた次第で全く異なる世界になるということ。ミュージシャンでもあるNTsKiだからこそその表現方法によって「ここではないここ」に私達を誘います。



川勝小遙

KAWAKATSU
Koharu



宮津にアーティストのレストハウス(万年倉庫)を構えながら、アーティストや学芸員として活動する川勝は「にしがき」の空間設計を行なっています。壁に配置された銀のシートや多様な色味の照明、そして元々この場所で使われていたレトロな什器やポスターなど、2名の作家達と協力して空間を設計しています。どこかレトロフューチャー(過去の視点から見た未来)を感じさせつつ、同時にNTsKiの作品の八丁浜の波の音が重なり、水のイメージを感じさせます。川勝は普段からアーティストが作品を発表する機会を自身もアーティストとしての目線からプロデュースをする仕事をしており、特に今回のような非常に特別なシチュエーションでの美術展を得意としています。アートという作品を「モノ(絵や彫刻など、単体の創作物)」として考えがちですが、実際にはインスタレーションと呼ばれる空間演出が作品鑑賞に非常に大きな影響を与えるのです。特に川勝は網野の地が海の豊かな環境に支えられているということ、そして過去に浅茂川湖を埋め立てて作られた場所であるということなどに注目し、水のイメージによる演出に強くこだわりを持ちました。そのような彼女の世界観の提案に呼応し、DAISAKやNTsKiの作品が効果的に配置されています。川勝は「作品を作る」という直接的な表現だけではなく、空間設計によって他の作家たちの作品を演出しながら、展示全体を通して網野町の風景や文化をめぐる眼差しの変容を試みています。





SIDE CORE

EVERYDAY HOLIDAY SQUAD

岬のサイクロプス

協力

スコップ提供 / 京丹後の皆さま



Photo:濱田晋

真ん中で区切られた2つの空間があります。SIDE COREの展示は経ヶ岬灯台に関する3連作となっており、目の前の空間には「立ち並ぶ沢山のスコップ」その奥に「岩に巨大な目玉の影を映した写真」が設置されています。そして奥の部屋には「経ヶ岬灯台に巨大な目を取り付ける映像作品」が設置されています。スコップの間を抜けて奥まで入ることができます。

1)スコップに関して

この作品は東京都芸術祭がエア地域の人々に声をかけ集めたスコップ200本あまりで構成されています。「なぜかスコップを集めているらしい」という噂が広がり、短い期間でありながら大量の数が集まりました。スコップをあえて立てて並べることで、普段個性を感じないスコップに年代や用途など様々な違いが見えてきます。スコップが立てられている事が人が立っている様子に見えますが、ついさっきまで使われていたスコップが一時的に地面に刺されて置かれているようにも見えます。また、大量のスコップの背景には石切場の写真が貼られています。この石切場は経ヶ岬灯台の真下であり、そこで採取された安山岩は灯台の建設資材として利用されました。しかし灯台から石切場までの高低差が200m以上ある急斜面であった他、浦西という非常に強い風が吹く地帯であり、その作業は困難を極めたと容易に想像できます。この灯台建設の



写真や資料はほとんど残されておらず、その建設に関してはわからない事が多いそうです。この作品は、そのような灯台建設の背景にある重労働、時間、そして従事した多くの労働者など、今では知りえない労働への想像力を膨らませます。それはまた、灯台だけではなくありとあらゆる土木作業に通じる視点です。道路や建物だけではなく川の護岸から山の斜面まで、私達の暮らす環境の背景には全て人の手が加わっており、そのような労働への想像力を膨らますことをこの作品は意図しています。

2)写真作品に関して

先の文章でも触れていますが、本作は経ヶ岬灯台の建設のために安山岩を切り出した石切場で撮影された写真です。作業員姿の人物が肩車をして、ヘルメットに取り付けたヘッドライトで石切場に巨大な目の影を照らしています。この写真の背景にある山の頂上付近に経ヶ岬灯台は位置しており、また石切場の目の前には日本海が広がっています。この岩場は最寄りの駐車場から30分近く起伏の激しい山道と海岸を歩いて行く事ができます。また岩場はそもそも起伏が激しく「この場所が石切場であった」ということを探し出すことは困難です。ここにいつも釣りに来ている釣り人さえ、その歴史に気がつく人は少ないでしょう。この「目」は海を監視するエクスパンドレーダーと同じ方角を見ていると同時に、この

岩場自体の歴史や地形の個性を発掘/調べる視線を表現しています。

3)映像作品に関して

本作は2019年に制作された作品で、経ヶ岬灯台のレンズに巨大な目の切り紙(ステンシル)を取り付け、灯台をギリシャ神話に登場する一つ目の巨人「サイクロプス」に見立てるという内容です。灯台のレンズや台座がフランス万博で購入されて来た1893年、フランスで活躍していた画家オディロン・ルドンは何枚ものサイクロプスの絵を描いています。ルドンの絵に描かれた1つ目の巨人の多くは真っ正面を見ており、それは作品を鑑賞している「鑑賞者を見ている」のです。歴史ある経ヶ岬灯台は京丹後の重要な観光資源であり、船を誘導する役割を担っていることから、人々に「見られるもの」です。しかしかつて灯台は「見るためのもの」でもありました。具体的には過去は日本海の国防を担う監視所として、そしてレーダー基地として使われていたからです。映像の最中に動物達が登場しますが、私達は動物に出会った時、「動物を見た」と言いますが、もしかしたら「動物に見られた」が正しいかもしれません。灯台も実際かつては「こちらを見て」いました。本作はそのような経ヶ岬灯台の歴史を通して、「見ること」と「見られることについて」、人が互いに向ける視線に関する考察が題材となっています。



大京都芸術祭 2020 in 京丹後 オンライン配信トークイベント

青木 彬×前谷 開×鷺尾 怜× DAISAK×NTsKi

青木 皆さんが滞在していた網野エリアには、今回、前谷さんと鷺尾さんのような外部からのクリエイターと、DAISAKさんやNTsKiのような地域クリエイターが滞在していました。まず、前谷さんに伺います。今年3年目の滞在ということで、写真を1000枚以上撮ってきたとのこと、でもかなり厳選された作品での展示空間のように感じました。撮影している中で、モチーフの選択や撮影するエリアの変化はあったのでしょうか。

前谷 ざっくり言うと、僕はここで、風景の写真を撮影していました。普段の僕は山に住んでいるので、海、特に日本海は新鮮で、ずっと海沿いを移動しながら写真を撮っていました。日本海を見ると、大陸と日本が離れていく感覚がありました。そこから着想を得て「岩を撮る」と決めて、撮影し、発表しました。

青木 前谷さんの作品というと、セルフポートレートの印象が強いと思います。その「見る / 見られる」という関係の構造だけでなく、今回の風景写真では「岩」というモチーフのせいなのか、写真を天井から吊っていたり、かつ、かなり角度のついた空間を巡っていくような構成が印象的でした。

前谷 セルフポートレートを撮るときは、青木さんの言うように「見る / 見られる」、つまり「カメラの前に向き合う僕 / 写真に向き合う鑑賞者」ということは考えています。今回の風景写真の場合は、そうした関係性や「岩」というモチーフだけではなく、僕の目の前に広がる空間の感じを展示会場でも見せたいと思って、空間を構成しました。

青木 鷺尾さんの展示空間も印象的でした。廃墟のような場所で、ストーリーが一種のパフォーマンスのように聞こえて、とてもスリリングな体験でした。どういうきっかけでこの場所を選んだのか、教えてください。

鷺尾 このエリアに来るのは3年目になりますが、最初のころ「京丹後 廃墟」でインターネット検索したとき、出てきた場所の1つで、ずっと気になっていました。でも規制が厳しくなり、入るのが難しくなっていた場所でもあります。屋外や広い場所で展示をすると、危ないことが起こったり、肉体的にも大変ですね。あえて僕はそれを体験したい、体感したいと思って、選びました。

青木 もう1つ僕が気になったのは、「時間」です。パフォーマンスだったり、鷺尾さんが時間を掛けてそこに関わってきた痕跡が見えました。さらに作品の中で、時間軸がある映画をキーワード

として差し込んでいたことです。

鷺尾 映画に時間軸があることに、今気付きました。どちらかというと、何かするときに発生する危ないこととか、公共性に抗いたいと思います。僕の作品では「極私性」という言葉を使っているのですが、その言葉は「極私的エロス」という映画から拾いました。

青木 それによって作品の背景や物語性が生まれて、奥行きのある空間を体験できたんですね。続いて地域クリエイターの皆さんに、地域のスーパーマーケット「にしがき」とコラボレーションした作品について伺います。地域の方にとっては、普段の生活で使われている場所ですが、僕は「にしがき」側の反応が気になりました。

DAISAK 「にしがき」の二階で、「にしがき」のロゴを使った作品、グッズを置いて、売りました。「にしがき」の人からは、アーティストがデザインするとういうものが出来上がるのか、「ほんまに売れるの?」と不安がっていました。でもイヤな感じはなかったように思います。

NTsKi 「案外ええやん」みたいな、リアクションは良かったです。今回「にしがき」の網野店でしたが、他の店舗でも出来そうな気がしました。

勝冶 真美×田中 良佑× 高橋 臨太郎

勝冶 先ほど、田中さんと高橋さんにご案内をいただきながら、展示を見てきました。お二人の展示場所に行く道のりさえも、鑑賞者にとっては体験のように感じました。まず、リサーチの対象としてその場所を選んだ理由を教えてください。

田中 日本でも外国でも、経験したり、見たものを作品にすることが多いのですが、自分の距離のダイナミズムや経過は、うまく伝わらない。特に味土野は、当初から心細い気持ちで通っていて、その体験を作品に入れたいと思いました。

高橋僕は三津という小さな漁港です。1年目のツアーバスでそこを通りかかって、岩場や集落がビジュアル的に印象に残っていたことと、風景や人がホコリのように循環している表現をしたくて、この漁港を選び、展示はその近くにある三津八幡神社芝居舞台で行いました。

勝冶 このリサーチプログラムは行政機関がしているのに、単年度で終わるのではなく、3年間もあります。田中さんは、味土野という同じ場所のリサーチを3年間続けています。今回の展示会

2020年10月23日（金）
18:00-20:00
キュレーター×アーティストトーク

場ガラシャ荘では、昨年度つまり2年目の作品と、今年度の作品があり、その2つはすごく対照的に見えました。

田中 事前に「今年はこの作品をつくらう」という感じで入ってないのですが、今年はコロナウィルスの影響もあって、なんとなくふさぎこんでいました。今年5月から、味土野にメグミさんという人が住み始めていて、景色は同じなのに、人がひとりいるだけで違うんだ、と前向きな気持ちになりました。前回の作品では影、今回はサイアノタイプ(紫外線で感光させる写真技法)を使っているのは、消えてなくなるものよりも、後に残るもののほうがいいなと思ったからです。

勝冶 田中さんのテキストに「忘れること」と「記憶」というキーワードがありましたね。どちらも消えていく、それが田中さんにとって重要なのでしょうか。

田中 味土野という場所に、人がいたという情報は分かっても、それを共感することは難しい。跡形もないので、想像することも難しい。だから僕は、消えていくものに対して、何かしてきたいと思っています。

勝冶 高橋さんは昨年度ジャガード織機を、今年度は水をテーマにされていました。この変化について教えてください。

高橋 いつも身体をあるシステムに入り込ませる、介入させる作品をつくっています。でも今年にはコロナウィルスのこともあって、人を取り込むことがなかなか難しい。それよりも、風景や町を体感したいと思いました。三津漁港周辺はとも入り組んでいて、山道のような路地を進むと古墳があり、展示会場の神社ではかつて、集落の人たちが集まって大衆演劇をしていました。三津は水が豊富で、山から水が湧いて、漁港の崖から水が垂れていたり、ため池に落ちている。そういう水の循環を見て、自分でも水路をつくって、鑑賞者が水のように通過するようなイメージで、今年度の展示をしました。

勝冶 三津八幡神社に大きな茶釜があり、水琴窟、水の音を聞くことができました。なぜこの場所にしたのでしょうか。

高橋 本当はすり鉢状の漁港で音を響かせたかったのですが、少し離れたところを水琴窟にして、風や波の音、ノイズに混ざる音を聞くほうがいいと思いました。取材した町の方の「私たちは水辺に浮かぶホコリのようなもの」という話にあったホコリという言葉がとても輝いて見えて、タイトルに「dust」と付けています。

慶野 結香×石毛 健太× SIDE CORE

慶野 石毛さんとSIDE COREは峰山エリアの吉村機業(株)旧織物工場で展示をしていました。SIDE COREは作品に経ヶ岬の灯台を使い、石毛さんはそのレプリカを使っています。レプリカなので、それ自体が光を発することはなく、中に回転プロジェクターを入れて、Googleマップの映像を投影していました。

石毛 あのレプリカの灯台は、旧丹後町役場の庁舎屋上にあるものです。流れている映像は、3つの場所です。旧丹後町役場近くの海岸線、経ヶ岬の海岸線、それとエジプトのファロス島。ファロス島の灯台は、ものすごく大きな古代建築で、でも侵略などで、いまは形がありません。今ではスペイン語などで「灯台」を意味する言葉になっています。そういった、物語の中だけにある灯台と、形だけのレプリカの灯台が重なったら、面白いと思いました。

慶野 石毛さんの作品は、灯台をもとに普遍的でタイムレスな表現をしています。(略)普段からアーティストとしての活動以外にも、郊外などを題材にキュレーションやリサーチといった活動も行っていると思いますが、他の場所と京丹後が違ったこととはどこですか。

石毛 昨年と今年、僕の気持ちはあまり変わってないのですが、1年目にリサーチしたことが、それぞれ別の作品になっています。京丹後で生活しているとき「ここは日本海だぞ」と、何度も言っている自分がいました。湿気がある、海が荒れている、建築の肌理も違うし、ホコリの積もり方も光も違う、地理的なことばかりですが、僕はそう思いました。

慶野 SIDE COREの展示では、経ヶ岬の灯台を使った昨年度の作品をドキュメンテーションした映像と、その手前にスコープ200本を使った新作を展示していました。

SIDE CORE 松下 昨年度、灯台について扱って、今年も灯台しか思い付きませんでした。この灯台に行くまでの距離はとても遠く、本当に大変なんです。灯台が作られた過程や周辺環境などを調べたり、想像したとき、そんな大変な場所に灯台を建てた「労働」を可視化しようと思いました。

SIDE CORE 西広 それでスコープを並べることにしたのですが、どう展示するかをすごく悩みました。家の近くの公園でも、テストしました。

SIDE CORE 松下 最初は、実際の灯台のふもとで展示しようとしたんです。でも条件が悪くなくて、あきらめました。3年目になって、僕たちが内容や展示方法を、より難しく考えてしまったというのがあります。でも、灯台に上りまくって、安山岩にも行きまくって、釣りもして。行き続けて、身体にも記憶させて、満足するまでやろう、悔いのないところまでやってみようと思いました。

慶野 1、2年目は、他のアーティストにアドバイスをワークショップもしていましたよね。

SIDE CORE 松下 アートプロジェクトなりの提示、考え方、意識があると思うのですが、昨年まではみんな緊張していたように感じます。今年はそれが解き放されて、地が出たような、自分のやり方のような作品が出てきました。僕たちも、地域クリエイターたちと一緒に発表ができたし、その地域の場所のことや状況が分かったのは、3年目だからだ、と思っています。

クロストーク

安原 (web版「美術手帖」編集部) 今日はありがとうございました。全体で見て、映像の使い方が気になりました。それは鷺尾さんの作品を見たときに、作品の不安定さをそのまま出しているように感じたからです。他の皆さんの作品でも、人によっていろいろな見方ができる作品なのに、説明するように映像で作品がつくられているように見えました。

鷺尾 僕の場合、映像が作品の解釈を与えてしまうものになったり、どこかでアーカイブとなって見ることができたり、流通しやすくなることに「抗いたい」と思っています。展覧会場にはQRコードも示していて、それは実際会場に来た人が、作品についてテキストや図で分かるようになっています。しかし、おそらくあのリンクを踏む人は本当に興味を持ってきている方だけだと思うんです。だから、ツアーに参加できなかった方や、僕が現場にいれなかった時に観にきていただいた方は、つまりほとんどの場合、僕の作品に対して、異なる印象を持っているんだろうと想像しています。僕はそれでいいと思っています。そういう非対称性について考えることがあの作品にとっては重要だったからです。そしてそれは、会期中にそもそも京丹後にくることができなかった人の存在を考えることにも繋がっていくんだと思います。

勝冶 「風景泥棒」というタイトルは、SIDE CORE 松下さんですか。

SIDE CORE 松下 そうです。例えば、その場所の歴史を知れば、その場所の見え方が変わります。僕たちはもともとグラフィティやストリートアートの専門なので、グラフィティの読み方が分かれると、町に文字がばーっと見える。だからアーティストが風景の中で何かをする、それでその風景の見え方が変わる、という意味です。結果的に、ひとりひとりのアーティストがコンテクストを持って、場所や歴史に対して何かしていたし、それはなかなかできないことだったので、このタイトルで良かったと思っています。

慶野 いつの時点で「風景泥棒」と付けたのですか。

SIDE CORE 松下 昨年です。僕は東京で子育てをしていて、遠隔操作のような形で、メールなどを使って、みんなと作品プランをやりとりして

いました。参加アーティストだけでなく、地域クリエイターまでも、場所の見方を変えるような内容、この「風景泥棒」というタイトルに引き寄せられていきました。

慶野 「大京都芸術祭」にもある「芸術祭」という言葉は、「越後妻有トリエンナーレ 大地の芸術祭」のように、もう20年近くも使われています。「芸術祭」は、もともとバブルの後の野外彫刻展、風景に作品が溶け込んでいくようなアプローチから、映像を使って、その地域や風景をドキュメンテーションするようになって来ています。つまり、芸術祭や作品やその展開が、昔に比べて違うフェーズに入ってきたように感じます。

SIDE CORE 松下 本当は「大京都芸術祭」と付ける必要はなかったのかもしれませんが、でも、町の人たちにどう見てもらうか、というときに「芸術祭」という言葉をあえて借りました。映像を使うことは、時代的な問題もあると思いますが、扱いやすいメディアなのでしょう。どこかに来て、何かをするとき、作品という物質に残すとするなら、映像や写真はすごい有効なメディアで、ついつい使ってしまう。でも、それぞれのアーティストが映像じゃない見せ方を考えたことも、3年目だからできたと思います。

青木 今回の展示は、地域の人、外から来るお客さん、誰にとって風景が変わるのでしょうか。地域クリエイターと一緒に展示することやキャプションの表記も含めて、僕には地域の人がある場所を再発見していくような視点を感じました。

SIDE CORE 松下 地域の人も見ている、見ることができるようにしないといけない。それが、好き勝手にできない一番の葛藤でした。僕たちはよそ者なので、そこで今回、地域クリエイターの存在は本当に大きかった。日本各地で行われているこういう芸術祭やアートイベントでは、開催する地域の人や地域でものづくりをしている人をないがしろにしていることが多いんです。でも、京丹後にいる地域クリエイターの3人は、普段からその地域で作品を制作しているし、地域の人たちの視点を変えることを余儀なくされています。地域に対する考え方をアートで泥棒してくれる3人で、本当に良かったと思います。

大京都芸術祭 2020 in 京丹後
オンライン配信トークイベント
YouTube



略歴

Biography

石毛 健太 ISHIGE Kenta	参加アーティスト	鷺尾 怜 WASHIO Ray	参加アーティスト	前谷 開 MAETANI Kai	参加アーティスト
美術家 / インディペンデント・キュレーター / Urban Research Group(URG)運営		アーティスト		アーティスト	
1994年神奈川県生まれ。2016年多摩美術大学卒業2018年東京芸術大学大学院修了。都市や郊外についての再考や物語の読み替えをテーマに制作する。主な参加展覧会に「生きられた庭」(2019)「東京計画vol.3」URG NEW ADDRESS (2019)主なキュレーションに「変容する周辺 近郊、団地」(2018)「高橋 臨太郎個展 スケールヒア」(2019)「working /editing制作と編集」(2020)		1995年 東京都生まれ。制作の極私的あるいは社会的実践について考える。主な展覧会に「クロスポイント」(W+K+ Gallery・2017)「セコンドハンド」(アキバタマビ21・2018)「ぼくらとみんなは生きている5〜持続可能な愛のステージ〜」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA・2019)「ぼくらとみんなは生きている10〜豚の旅ともいえない〜」(四谷未確認スタジオ・2020)		1988年 愛媛県生まれ。2013年 京都造形芸術大学大学院 芸術研究科表現専攻修了。自身の行為を変換し、確認するための方法として主に写真を使った作品制作を行う。2019年より京都と滋賀の県境にあるシェアスタジオ、山中suplexに加入。主な展覧会に、「六本木クロッシング2019 展:つないでみる」(森美術館/東京・2019)「群馬青年ビエンナーレ2019」(群馬県立近代美術館・2019) など。	
高橋 臨太郎 TAKAHASHI Rintaro	参加アーティスト	田中 良佑 TANAKA Ryosuke	参加アーティスト	SIDE CORE サイドコア	ゲストアーティスト
アーティスト		アーティスト		アートコレクティブ	
1991年 東京都生まれ 東京藝術大学大学院 美術研究科博士後期課程在籍。パフォーマンスや音楽演奏等、自身の身体によって空間に働きかける表現をする。個展「スケールヒア」(BLOCK HOUSE/東京・2019) 主なグループ展「清流の国ぎふ芸術祭」(岐阜県美術館・2020)「風景泥棒」(京都・2019)「そとのあそび」(市原湖畔美術館/千葉・2018)「Social Concrete」(W+K+ Gallery/東京・2018)		1990年 香川県生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院修士課程美術研究科壁画専攻修了。「社会の中のそれぞれの『私』」という言葉을大切に、この世界で生きるそれぞれの人生の可能性を探る。「Exultation is the going」(東京・2020)「hello/ENTER」(シンガポール/東京・2020)「working/editing制作と編集」(東京・2020)「Nonsense Agency」(台湾・2019)「As a flower」(個展/東京・2019) など。		2012年より活動開始。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。美術史や歴史を背景にストリートアートを読み解く展覧会『SIDE CORE-日本美術と「ストリートの感性」-』(2012)発表後、問題意識は歴史から現在の都市や身体へと移行し、活動を実際の路上へと広げている。「生きている東京展」(ワタリウム美術館・2020)「Out of Blueprints」(Serpentine Galleries・2020)	

DAISAK ダイサク	地域クリエイター	NTsKi エス・ティー・エス・ケー・アイ	地域クリエイター	川勝 小遙 KAWAKATSU Koharu	地域クリエイター
陶芸家		シンガーソングライター/プロデューサー		アートプロデューサー/アーティスト/ 万年倉庫 代表 他	
1986年京都府生まれ。 京都精華大学大学院修了後、山中Suplex (シェアアトリエ)にて制作。 2018年から京丹後市網野町に移住し自身の工房で制作。 地球上に存在する全ての物を参考にし、置物や食器などNEWでOLDな陶器を作っている。		京都府育ち。どこか不気味さの漂うボーカルと多様な音楽性が混在するトラックを制作しシームレスに活動。セルフ・プロデュース作以外では、〈TAR〉から食品まつりa.k.a foodman、〈Orange Milk〉からCVN、〈EM Records〉から7FOとのコラボ楽曲をリリース。 田我流のアルバム『Ride On Time』への参加、落合陽一氏が統括ディレクターを務めたSXSW2019に出展された経済産業省主催日本館への楽曲提供などがある。 ntski.com		1990年京都府生まれ。京都市出身。 東京造形大学サステナブルプロジェクト専攻卒業。 東京に拠点を構えながら、京都府宮津市、cluster、ホテルにて、アーティストのレストハウスや社交場を作り、参加者が自身の価値を見出し、その人らしい生き方をするキッカケ作りに取り組む。また、そこに関わったアーティストの活動をライターとして発信する傍ら、インスタレーション、コラージュ作家として国内外で様々な展示に参画する。	
勝冶 真美 KATSUYA Mami	イベントゲスト	慶野 結香 KEINO Yuka	イベントゲスト	青木 彬 AOKI Akira	イベントゲスト
京都芸術センタープログラムディレクター		キュレーター/青森公立大学国際芸術センター青森〔ACAC〕学芸員		インディペンデント・キュレーター	
1982年広島市生まれ。広島市立大学国際学部卒業。京都芸術センターアートコーディネーター、公益財団法人有妻斎弘道館学芸員を経て、現職。現在はアーティスト・イン・レジデンスプログラムや展覧会事業等を担当し、事業企画・運営を行う。		1989年生まれ、神奈川県出身。東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。2014年から2016年まで秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻、社会貢献センター(現・アーツセンターあきた)助手。サモア国立博物館を経て、現職。			



未開へのわだち

-Ruts to the new uncivilization-

自然-人工物の境界は、様々な力学によってゆらいでいる。未開墾地を開拓する者、山中に修行場をおく山岳信仰、そして自然災害。既に開拓された場所を往来する私たちの行動は、境界を越境することのない社会循環をトレースし続けている。

聖武天皇時代に開拓された恭仁京東北道以前の深山幽邃な気配と共に、境界の残像をのこす和束町。アーティストは自生の草や茶を手がかりに、ときに身体感覚を風景や気配にフローさせながら、この土地にある「人の営み」「自然に存在する他の種」「認識不可能な不可視な存在」までも拙くも引き寄せ、境界を中和し未開へのわだちを描きはじめる。

自然と人工物がハイブリットし未知の領域を限りなく開拓しつづける社会の流れに、私たちはいる。この流れの中、心身ともに粗野な感情をかきたてる境界や未開の地はどこにあるのだろうか?この疑問が既成概念や価値基準を融解し、私たちの内なる野生を明滅させるきっかけとなるかもしれない。

開催概要

開催期間

10月30日(金)－11月1日(日)
11月6日(金)－8日(日)
11月13日(金)－15日(日)
各日10:00－17:00

展示会場

(株)すぎもと倉庫・空き店舗
手づくり工房茶房桶力
京都おぶふ茶苑
FUKUTYAN_HOUSE
創造工房自由庵

参加アーティスト

渋田 薫
嶋田 晃士
牧嶋 平
リヴァ・クリストフ

ゲストアーティスト

Yukawa-Nakayasu

プログラム

「展示ツアー」

11月8日(日)13:00－
ゲスト: 鷺田めるろ
(十和田市現代美術館館長)

「福岡久閑×渋田薫」
於: 会場インフォメーション内、
「福岡久閑」ホームページ内
会期中、7種の荒茶のイメージに合わせた絵画を展示

主催/協力

主催

京都:Re-Search実行委員会
(京都府、和束町 ほか)

協力

(株)すぎもと
(有)北午木材
京都おぶふ茶苑



Yukawa-Nakayasu

未開地のアフォーダンス

協力

上嶋爽祿園/株式会社すぎもと/
株式会社宮幸/北建材店/茶舗円通/
AOIOA(芦内晋/西川元晴)/
小畔夕/岸田良博/高田幸人/
富永一真/八木梓/山内秀明



Yukawa-Nakayasu(以下,Y-N)は、和東町の山岳信仰から「自然と人工物の境界」に着目し、「滝行をおこなえる未開地」を出現させた。本作は、Y-Nの鷲峰山でのフィールドワークを追体験するかのように、3階建の倉庫を回遊し作品に遭遇する体験をもたらす。また展示共有した嶋田晃士との協働は、展示空間で両者の作品を分断することなく、静かな共鳴を生み出していた。

この鑑賞プロセスは、鷲峰山の修行場にある「御光ノ滝」が描かれた作品を、暖簾風に分けいる越境体験から始まる。その先では、自生の茶の写真、化学肥料を結晶化させたエッチング作品、そして茶畑の石垣を模した彫刻が展示されている。それらに共通する意匠「人の管理から外れた自生の茶」は、和東町の茶業とあいまり、「自然の状態(あるがままの状態)とは何か」と、私たちの既存概念に疑問を投げかけてくる。

そして作品の中核をなす、町内の自然物(石、土、水)を倉庫内に再構成した人工の滝は、製茶の機械音が鳴り響くなか会

場内を循環する。自然と人工物がハイブリットされた未知なる空間は、言葉で表現する前に、鑑賞者の感情をかき立てていた。

2階にある「岩石を粉砕し建材を生産する碎石場風景」のエッチング作品は、その場所から俯瞰できる人工の滝と「土地の開拓」を緩やかにつなげる。また倉庫の頂上では、自然石に「滝が流れる山水画のように化学肥料を結晶化させた」彫刻作品が、展示全体ひいては和東町の山岳に見立てられている。そして未開地は、開拓を横目に私たちのまわりに潜んでいると示唆していた。

この日常を異化する鑑賞体験は、未知の解明をつとめる安全な社会に、私たちが暮らしていることを逆照射している。これからも未知との遭遇をくりかえす私たちは、時に怯え、また歓喜するだろう。そのような近未来にむけて、本作は未知なるモノへの抗体として「豊かな想像力」を私たちにもたらしたのかもしれない。





嶋田晃士 SHIMADA Kohshi

クラスの外側

協力

AOIOA (芦内晋/西川元晴) /
株式会社すぎもと/上嶋爽緑園/
山内秀明/山口みゆき/
和束茶手揉技術保存会



嶋田晃士は、人の価値基準から外れた「自生の茶や廃棄物」からキネティック作品や映像を制作し、私たちが既存概念の外側へ導く。作品《クラスの外側》は、Yukawa-Nakayasuと空間を共有した倉庫全体に作品を点在させる形で発表している。

まず1階入口で鑑賞者を迎えるのは、「茶畑から外れた自生の茶」の写真作品である。舗装された道に矯正され異様に曲がった根をもつ茶の木は、価値付けした商品のよう撮影されている。加えて中に進むと、鑑賞者は「茶葉が蝶々の羽のように動く」キネティック作品に遭遇する。こうした自生の茶がもたらすお茶に対するイメージのズレは、私たちがもつ既成の認識を解離させていく。

そして2階の映像とコラージュ作品では、茶にとどまらず廃棄された日用品へと視点が移される。廃棄物たちを接写撮影したスライドショーに、フランス哲学者サルトルの作品「嘔吐」の語りを組み合わせた映像。塗装表面がはがれ落ちた電化製品などの写真と、その物の破片を組み合わせたコラージュ作品。両作にある作家の視点をなぞるような鑑賞

体験は、人の信じる価値観や基準が決して普遍的ではなく、その認識の表面はただの幻想にすぎないことを私たちに突きつける。

そして遂に、3階の開口部分から洗濯機を振り子状に落下させ、滝をつき抜け、空中の銅板にあてるパフォーマンスによって、私たちは既存概念の外側へ導かれる。これまで見たことがない未知の体験は、「おろしたての身体感覚」を呼び覚ます。嶋田は、荒廃茶園や不必要になった物たちと出会うことが、自身の価値観や帰属感を揺るがすキッカケとなったと語る。また私たちも、本作によって認識の外部、普段直視することのないクラスの外側に、踏み入れたのかもしれない。





渋田 薫 SHIBUTA Kaoru

組曲



渋田薫は、生命力溢れる茶の新芽、猿の群れとの遭遇、また町人との心象体験まで、「土地での経験を絵画に変換する事」で制作をおこなう。徒歩圏内の3会場でメインの4作品と小作品を展示した渋田は、オーケストラの楽曲のように4つの絵画に番号をふり、連作《組曲》として発表している。

メイン会場の(株)すぎもとでは、吹き抜け部分に長さ6mのペインティングが2点吊り下げられ、鑑賞距離によって異なる体験をもたらす。組曲第1番《Back to the nature》は茶畑の新芽を、第2番《New green leaves》は人間界の新芽ともいえる子供をテーマに、共に活発でリズムカルな様相をキャンパスに映し出していた。

また創造工房自由庵に展示している第3番《Monkey time》は、野生の猿に出会った経験から、まるで猿を憑依するかのように指で描いていたマチエールが特徴である。害獣被害が多発する和束町の体験を、絵画手法に変換していた一例である。そして第4番《Grandma》は、「京都・Re-Search 2019 in 和束」の参加者 池上綾乃さんが作

曲する「Wazuka」が空間を満たすウッドデッキに、屋外展示されている。ロッキングチェアに座り、和束町の風景と共に鑑賞する方法は、本作のタイトルであるGrandma(祖)母なる大地に抱かれる体験をもつ。

渋田は連作《組曲》としてペインティングにストーリーをもたせる事で、各会場の土地や風景をつないでみせた。そして《組曲》のハーモニーは、鑑賞者に和束町が奏でる余韻をのこしたのではないだろうか。

協力
とみたちひろ/北和久(北午木材)/
岡田奈津枝(福岡久園)/池上綾乃/
Hideto Uesugi/鴨江アートセンター/
Elisabeth Jones Art Center/
雲の平山荘アーティストインレジデンス/
Kronos Art BCN/ARTS
SANTAMONICA/d:matcha Kyoto
CAFE&KITCHEN/八木梓/山内秀明/
大岡英介(oversoul sound studio)/
和束町立和束保育園



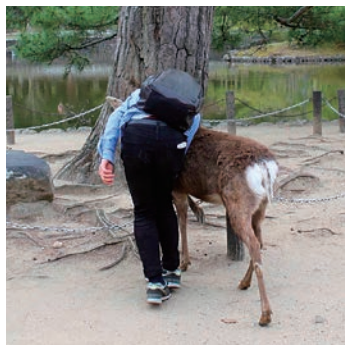


牧嶋 平 MAKISHIMA Osamu

も 草玉を燃す

協力

岡本孝介/杉本豊文/有限会社北午木材/
北昇/岸田良博/キザキ食品株式会社/
岡田泰典/よしだぎょうこ/吉田豊子/
南唯乃/村田優大/太田凌嘉/国土交通省
近畿地方整備局木津川上流河川事務所/
京都市立芸術大学大学院構想設計領域/
杉本則行(株式会社すぎもと)/杉本千枝



牧嶋平は、人々の営みを「草刈り」に重ね合わせ、日々の生活に積層される感情をあらわすかのように、刈草から5mの巨大な《草玉》を制作し、民家が立ち並ぶ日常の風景を変えた。そして会場入口のランドマークである草玉に圧倒された鑑賞者は、草のにおいに導かれるように、部屋の半分が草で覆われたインスタレーション《生活の総量》にたどり着く。その空間では、映像作品《父の草刈り》を通して、牧嶋の叔父が残した長野の家で、季節ごとに行われる終わることのない草刈りと、私たちの死ぬまで不可逆的につづく生活が重なり始める。そして「生活全体は草刈りである」と語る牧嶋の想いに近づいていく。

鑑賞者は、1階のインスタレーションを抜け、2階に案内される。元の倉庫の様相を残した2階では、ドローイングや映像が展示され、また床板が外された隙間から1階に安置された《祖母の墓標》がのぞける仕組みになっている。そして2階の奥の映像作品《獣は死なない》は、牧嶋自信が猪の毛皮を顔に巻き、グルグルバットを行うパフォーマンス映像である。獣が自殺しない事に着目した本作は、

叔父の死とそれがもたらした草刈りへと接続されていく一方、現代社会の生活にある心の淀みを、暗に問題提起していた。

そして約300kgの刈草からできた作品群は、展示最終日のパフォーマンスをもって燃やされ完結する。その光景は、煙と共に「日々の情動」を昇華させ、また灰となって土地に溶け込み、ただ「いつもと変わらない日常」を土地にのこしていた。





リヴァ・クリストフ RIVA Christophe

筋トレ de 和東

協力

京都おぶ茶苑/(有)北午木材/
岸田オーナー/とみたちひろ/
湯船区長/和東町長/
なごみの湖(湯船フィッシングエリア)/
北建材店



リヴァ・クリストフは、「壁画」や「公共空間に介入する映像」を通して縦横無尽に、和東町に潜在する風景に足跡をのこす。町内6箇所に描かれた《壁画》は、所有者との絵柄交渉のプロセスを経て、主産業の茶業のほかに、木材や建材業など土地の生業を浮きあがらせた。プログラムを終えた後も町の風景にのこる壁画は、どのように和東町の表情に溶け込むか楽しみである。

またクリストフの作品は、ペインティングに留まらず展開する。室内展示の《筋トレ de 和東》は、町内の風景を背景に、スクワットや懸垂などの筋トレで介入する映像作品である。収穫のために切り開かれた茶畑の山道をランニングコースに、また町のモニュメントを懸垂器具にするなど、映える風景を筋トレ背景へと鑑賞対象をずらす事で、ユーモアと共に風景に対する固定観念を揺さぶった。同様の視点は、和東町のマスコットキャラクター「茶茶ちゃん」と似顔絵対決し、着ぐるみを動かす人間を描いた《似顔絵合戦》にも見られ、私たちに笑顔をもたらす。また地域レジデンスプロジェクトにある暗黙の地域への付度をあえて表わした絵画《二つの茶畑》

は、プログラムの制度批判というブラックユーモアな視点をもっていた。

クリストフは、会期中会場で鑑賞者の似顔絵を描き、時にラップのパフォーマンスを披露し、人との関係性を新たにつなぎ合わせていた。滞在中の出来事を即座に作品のアイデアに変え、あらゆる体験を取りこぼす事なく原動力に変えたクリストフの作品は、どこか愛嬌がありながらも辛辣な視点で、私たちに脳トレさせていたかもしれない。



「未開へのわだち」展

鷺田めるろ
十和田市現代美術館館長

和束町は、奈良県に近い、京都府の南の端にある。鉄道を乗り継ぎ、駅からはバスかタクシーで山あいを30分ほど走ってたどり着く。京都市に生まれ育った私も訪ねたのは初めてだった。山に囲まれたのどかなところで、茶畑が広がり、加工工場がいくつもある。展示会場は数カ所に分散していた。

メイン会場となったのは、巨大な倉庫と空き店舗である。ここに5人の作家の作品が展示されていた。倉庫と空き店舗との間には、道路に面した中庭のような空間があり、その空間いっぱいに巨大な草の玉が置かれている。これは牧嶋平の作品で、人の背の3倍程度、建物の2階分もの高さがある。横の店舗部分を通り抜けて奥の倉庫に入ると、そこも枯れ草で埋め尽くされていた。家族が管理している長野県の亡き叔父の空き家を訪ね、父母とともに草を刈り、家を掃除する様子を記録した映像が、草の間に設置されたスクリーンに投影されている。2階には草を縛ったような塊があり、近づいて見るとそれが動物の毛皮であることが分かる。2階の奥のモニタには、作家自身がそれを被って歩き回るパフォーマンスの映像が流れている。作家のステートメントにある「生活全体は草刈りである」という言葉には共感させられた。

建物の間の吹き抜け空間には、渋谷薫の縦長の絵が吊り下げられていた。音楽を絵に置き換える試みだという。他会場にも同様の絵があり、全体で「組曲」となっている。手のストロークを生かした、書のようにも見える線の塊が変奏しながら画面全体にリズムカルに反復されている。線の間を埋めるように塗られたカラフルな色彩は、絵画よりもデザイン的な感覚が見られたが、かつて渋谷がヘアメイクの仕事をしていたと聞いて腑に落ちた。

嶋田晃士は、お茶の木が自然物でありながら、人間によって栽培され、刈り込まれている人工性に着目し、そこから

逸脱した自生する茶を写真や模型で捉えている。一方、廃棄された洗濯機などの家電が自然の中に還ってゆく様子を撮った写真や、茶葉が機械仕掛けで虫の羽が動くような小さな立体もある。自然と人工物との境界をテーマにした「未開へのわだち」という本展のテーマに正面から向き合った作品だと感じた。

本展の企画も行ったゲストアーティストのYukawa-Nakayasuは、会場内に実際に水が落ちてくる滝を出現させた。嶋田とともに大掛かりなインスタレーションで力作だった。滝の下は小さな池のようになっていて、飛び石がある。山岳信仰の修行である滝行のように、ふんどし一つになった作家が滝の下にあぐらをかいて座るパフォーマンスも行われた。そのとき、上からぶら下げた洗濯機が振り子のように頭上を飛んでくる。命がけである。この洗濯機のように、Yukawa-Nakayasuと嶋田の作品は一部重なりあう。観客を誘導する結界に、石に縄をくくりつけた「結界石」を参照するなど、ところどころに伝統的な和の意匠が見られた。聖武天皇時代に開墾されたという和束に和の伝統を重ね合わせていることが感じ取れる。

それとは対照的に、リヴァ・クリストフの作品は、地域のアートプロジェクトに対する制度批判的な視点を含むユーモラスなものだった。例えば、「付度アート」と彼が呼ぶ絵画は、町長が気に入りそうな様式で描いたもので、実際に町長に寄贈された。また、地域でのアーティスト・イン・レジデンスを「修行」と捉え、地域の様々な場所で筋トレを行い、その記録映像を上映した。

表現手段の異なる作家たちが、共同で生活しながら、ともに刺激しあい、作品をエスカレートさせて、全力で作った展覧会だった。

嶋田 晃士
SHIMADA Kohshi

参加アーティスト

アーティスト

1981年京都府生まれ。美術大学在学中に「音」を用いた表現に興味を持ち、サウンド・スカルプチャーを制作する。その後、「音」をメインに扱いながらも、複合的にメディアを用いた作品を制作するようになる。自分自身と現実との関係を俯瞰したいと思い、しばしば電子機器やコンピューターを作品に取り入れている。近年ではスマートフォンやデジタル信号等を用いながら、身の回りにある情報を捉え直した作品の制作、発表を行っている。

渋谷 薫
SHIBUTA Kaoru

参加アーティスト

アーティスト

1980年北海道生まれ。音楽、自然音のリサーチを元に共感的に絵画へ変換する。これまでにエリザベスジョーンズアートセンター、バルセロナ芸術文化センター、サンタモニカ美術館、ロシア国立現代アートセンターで滞在制作発表を行っている。The 14th Arte Laguna Prize特別賞(Arsenal,ヴェネツィア)。近年の主な企画展に『Virtual Artists Trail』(Sydenham Arts, ロンドン)、『After Greed Became Form』(White Rectangle Gallery, ロンドン)等。

牧嶋 平
MAKISHIMA Osamu

参加アーティスト

アーティスト

1986年埼玉県生まれ。京都市立芸術大学大学院構想設計領域在籍。旅先や日常でのささやかな気づきを手掛かりにインスタレーションを制作。

リヴァ・クリストフ
RIVA Christophe

参加アーティスト

画家

1993年大阪府生まれ。日本・フランス・中国、多様な文化圏で培った、ユーモア溢れるグラフィティと漫画の表現をするアーティスト。クリストフの作品の多くには、躍動感溢れるタッチで人間が異なるものにトランスフォームする姿が描かれる。それは多文化化する時代に、既存の言語や文化の枠組みで補いきれないコミュニケーションの為に生まれた、独自の視覚言語を作り出す試みである。

Yukawa-
Nakayasu

ゲストアーティスト

アーティスト

1981年大阪府生まれ。歴史や習俗や習慣をもとに、社会や身体、日常に内在している営みや現象を視覚化する作品を制作。2018年にThe 12th Arte Laguna Prize 大賞受賞(Arsenale, ヴェネツィア)、2017年に『JapaneseConnections』(Nikolaj Kunsthal, コペンハーゲン)など。近年では、2019年からアートハブTRA-TRAVELの共同代表を務め、2020年『ポストLCC時代の』(京都芸術センター, 京都)のキュレーションを手がける。

鷺田めるろ
WASHIDA Meruro

イベントゲスト

十和田市現代美術館館長

1973年京都府生まれ。東京大学大学院美術史学専攻修士課程修了。1999年から2018年まで金沢21世紀美術館キュレーターを務め、妹島和世＋西沢立衛／SANAA、アトリエ・ワン、島袋道浩、坂野充学などの個展のほか、「金沢アートプラットホーム2008」「3.11以後の建築」「起点としての80年代」などのグループ展を手がけた。また、2017年には「第57回ヴェネチア・ビエンナーレ」日本館キュレーターとして岩崎貴宏の個展を企画。2018年4月よりフリーランスで活動し、あいちトリエンナーレ2019にはキュレーターとして参加した。2020年4月より十和田市現代美術館館長。





日本博京都府域展開アート・プロジェクト | もうひとつの京都
Japan Cultural Expo in Kyoto Prefecture
Art Project Alternative KYOTO
京都: Re-Search 2020 実施報告書

発行 京都: Re-Search 実行委員会
(京都府、八幡市、京丹後市、南丹市、和束町)
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府文化スポーツ部文化芸術課内
TEL 075-414-4279 FAX 075-414-4223
MAIL bungei@pref.kyoto.lg.jp

デザイン 加瀬部敏志
発行日 2021年3月発行

<http://kyoto-research.com/>
Copyright©京都府

Japan Cultural Expo in Kyoto Prefecture
Art Project Alternative KYOTO
KYOTO:Re-Search 2020

発行＝京都：Re-Search 実行委員会

